



# 異構文(allostructions) に関する一考察

南, 佑亮

---

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 60:51-68

(Issue Date)

2023-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100485331>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485331>



# 異構文 (allostructions) に関する一考察

南 佑 亮

## 1. はじめに

Cappelle (2006) が提唱した allostruction (以下、「異構文」<sup>1)</sup>) モデルは、話者の言語知識を構文 (constructions) のネットワークと見做す構文文法 (Construction Grammar) の研究パラダイムに水平的関係 (horizontal relations) の重要性を持ち込んだという点で少なからぬ影響力を持ってきた。このモデルの有効性を節レベルの構文分析で実証した Perek (2015) 等を経て、現在もこのモデルを取り入れた研究は続いているが (Nesset and Janda 2023)、その一方で批判的な議論もある (De Vaere et al. 2020, 早瀬 2020)。この論考では、異構文モデルの特徴とその問題点をいくつか取り上げたうえで、構文現象の分析に関する同モデルの有効性を高めるための方策について一つの試案を提示してみたい。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では Cappelle (2006) による異構文モデルの定義を確認する。3 節では、異構文モデルに対する批判的議論を 2 つ取り上げる。4 節では、構文間の水平的関係がかかわる具体例を取り上げ、モデルに課すべき制限について議論する。5 節は結語である。

## 2. 異構文モデルの概要

Cappelle (2006) が異構文モデルを考案するきっかけとなったのは、他動詞に不変化詞 (particle) を伴う動詞句構文である。この構文には、[verb particle object] のように目的語が不変化詞に後続するパターン (「連続型」) と、[verb object particle] のように動詞と不変化詞のあいだに目的語が位置するパターン (「不連続型」) の 2 種類の語順があり、句レベルの統語的交替 (syntactic alternation) 現象の一種 (以下、「句動詞交替」) である。Cappelle は、最初に

句動詞交替に対する2つの対照的なアプローチを概観し、それぞれの問題点を指摘する。一つ目のアプローチは、一方を基本の構造としてそこからもう一方の構造が派生 (derivation) という統語演算内の操作を経て生み出されると見做す生成文法の立場における分析である。この分析に対しては、派生というプロセスが文法知識について単層的アプローチの立場を取る構文文法では認められない操作であるという理論的な問題に加え、一方を基底的な位置にするほど実際に頻度の分布には差がないという事実を考えると一方をベースにもう一方を生み出すという分析は心理的妥当性に欠けるという問題点を指摘している。もう一つのアプローチは、そのような交替 (alternation) と呼ぶべき構文間の水平的関係 (horizontal relations) の存在を認めず、問題の「連続型」「不連続型」の2つのパターンをそれぞれ独立した構文として個々に分析するだけで十分と見做す、「極端な (extreme)」構文主義に立つアプローチである (cf. Goldberg 2002)。この立場に対して Cappelle は、(i) 実質的にまったく意味を変えることなくどちらの語順でも使われる一連のイディオム表現 (例: *buck up one's ideas/buck one's ideas up*) が存在することの説明がつかず、(ii) もし「連続型」と「不連続型」の間に何の結びつきもないとすると、特定の句動詞 (例: *drum up support*) の言語習得において一方のパターンの習得の統計的阻止 (statistical preemption) (例: *\*drum support up*) が起こる原因が説明できない、という二つの問題点を指摘する。

句動詞交替へのこうした両極端なアプローチに伴う問題を解決するための方策として、Cappelle は目的語と不変化詞の語順が無指定の状態の構文の鋳型 (template) の存在を仮定し、連続型と不連続型の二つのパターンはこの共通のパターンの異なる具現形 (すなわち異構文) とするモデル (図1) を提案する。

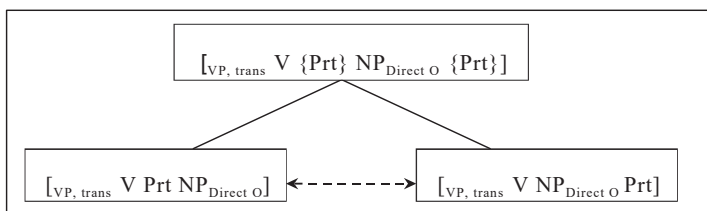


図1 他動詞の句動詞構文およびその2つの構文素(Cappelle 2006: 18より抜粋)

異構文モデルの特徴は以下のようにまとめられる。

[I] 図 1 の 2 つの異構文の関係は、変形規則を重視していた時代の生成文法理論で仮定されていたような一方の構文から他方の構文への派生 (derivation) 規則で捉えられるものではなく、2 つに共通した上位カテゴリー (supercategory) の存在によって保証されている。ただし、一方の方が他方のものよりも高頻度で用いられる (無標の地位にある) ということはありうる。

[II] このモデルは (allo- という接頭辞からも分かるように) 音韻論における異音 (allophone) や、形態論における異形態 (allomorph) の概念に触発されたものである。しかし特定の構文素 (constructeme)<sup>2</sup> の存在によって関係づけられた異構文同士は相補分布の関係にあるわけではなく、かなりの程度 of 自由変異 (free variation) が認められ、同じ環境でもどちらを使用することが可能なこともある。情報構造の一般原則、指示対象への馴染み度、焦点位置などの要因によって 2 つのうち一方のみが選択されることもしばしばある。

[III] 複数の異構文のまとめり (いわゆる交替現象 (alternations)) は、言語知識を構成する対象物 (Cappelle の言葉では “linguistic objects”) の一つである。

このモデルは、句動詞交替という現象の説明というレベルを超え、構文文法の研究において異なる形式を持つ構文間の水平的関係 (horizontal relations) の重要性が認識される原動力となり (Diessel 2019, 2023)、また同時に批判的議論も引き起こした。次節では、そのような批判的議論の一部を取り上げる。

### 3. 異構文モデルをめぐる先行研究の議論

Cappelle (2006) 以降、異構文モデルに対しては様々な角度から議論がなされてきているが、本節では、異音・異形態との比較 (3.1 節)、適用範囲の問題 (3.2 節)、の 2 点を取り上げ、その要点を確認する。

#### 3.1 異音・異形態との違いについて

「異音 (allophones)」 「異形態 (allomorphs)」 のように、言語学において接頭辞 「allo- (異)」 を伴った名称は、互いに相補分布の関係にある対象に与えられ

ているが、異構文 (allostructions) の場合は、談話上の要因などによる使い分けや特定の条件への選好性は認められるものの、そのような相補分布の関係は認められない (Birner 2018, 早瀬 2020)。ある環境があって、そこで用いる表現が、潜在的に、交替関係にある 2 つの変異形 (異構文) のどちらでもあり得るのであれば、2 つの関係は相補分布ではない。ただし、2 節で述べたとおり、異構文の持つこの特徴については Cappelle 自身も把握している<sup>3</sup>。

では、このような違いを認めつつ Cappelle は何故、接頭辞 *allo-* を使った名称を採用したのだろうか。実は、あまり注目されないことだが、Cappelle は異構文をあらゆるレベルの言語単位に適用される汎用性の高い概念として規定し、むしろ異形態や異音は異構文の特殊な場合と見做す可能性に言及している (Cappelle 2006: 21)。そのように捉えると、相補分布というのは音素・形態素という相対的に小さい言語単位での *allo-* 付き要素に固有の特殊現象であって、それよりも規模の大きい単位では必ずしも当てはまるものではないことになる。確かに、異音・異形態と称される現象が言語学の歴史の早い段階で明らかにされたというだけでは、その諸特徴がそれよりも大きな単位においても同様に当てはまるべきと結論づける理由にはならない。それに加えて、異音も異形態も、特に情報構造などの談話的要因などを加味した話者による複雑な表現選択行為が関わることのないレベルの言語単位で観察される現象であるという点では、特殊なものともいえる。もしそうだとすれば、語のレベルを越えた単位では実質的に同義関係にある形式同士の完全な相補分布関係という現象そのものが成立する可能性が極めて低いことも十分に考えられる<sup>4</sup>。ただし、異音・異形態と (句レベル以上の) 異構文との違いを相補分布の成立可能性のみに帰すことができるかという点には検討の余地が残る。これについては 4.1 節で検討する。

### 3.2 文レベルの現象への適用に伴う問題

Cappelle (2006: 21-22) は、構文文法において「構文 (construction)」の概念があらゆる言語単位に適用可能であることと連動して、異構文の概念もあらゆる言語単位に対して適用可能であるという見通しを述べている。異構文が句レベルよりも小さな単位 (音素、形態素) のレベルにも拡大可能であることは既

早瀬 (2020:189) は、異構文モデルの問題点の一つとして、それが適用できる範囲の線引きがなされていないという問題点を指摘している。具体的には、Cappelle (2006) や Perek (2015) の研究から、「動詞が共通していて、語順だけが異なる」という条件があるように推測できるが、それ以上の逸脱はどこまで許容されるのかが不明である。例えば、いわゆる繰り上げ (raising) と呼ばれる統語操作を伴う (1) のようなペアや、用いられる語彙は異なるが実質的に同義である (2) のようなペアは異構文として分析が可能なのかが判然としない。

- (1) a. It seems that he is drunk.  
b. He seems to be drunk. (早瀬 2020: 189)
- (2) a. This milk is too hot to drink.  
b. This milk is so hot that I cannot drink it. (早瀬 2020: 189)

他方、De Vaere et al. (2020) は、Cappelle の見通し (3.1 節参照) に反して、異構文モデルは *allosentences* (Lambrecht 1994) として分析されてきた現象を捉えることはできないと主張する。Lambrecht (1994) によれば、*allosentences* とは、「意味論レベルの意味は同じだが、形式と語用論レベルの意味が異なる文のペア (*semantically equivalent but formally and pragmatically divergent sentence pairs*)」(p. 6) のことであり、例えば能動文と受動文、規範的語順の文と話題化がなされた語順の文、主語に強勢のある文と述語に強勢のある文などのペアが *allosentence* の関係にある。De Vaere et al. (2020) は、イタリア語の *allosentences* の例文群 (= (3)) を引き合いに出し、これらの文

を異構文モデルで分析することの難点を指摘している。

- (3) a. Giovanni ha mangiato le fragole.
- b. È Giovanni che ha mangiato le fragole.
- c. Le fragole, le ha mangiate Giovanni.
- d. C'è Giovanni che ha mangiato le fragole.
- e. Ha mangiato le fragole, Giovanni.
- f. GIOVANNI ha mangiato le fragole.
- g. Giovanni ha MANGIATO le fragole.
- h. Giovanni ha mangiato LE FRAGOLE. (De Vaere et al. 2020: 107)

(3) の 8 つの文は、それぞれ規範的な平叙文 (=3a)、典型的な分裂文 (=3b)、話題化された文 (=3c)、非典型的な分裂文 (=3d)、右方転移 (right dislocation) された構成素を含む文 (=3e)、主語強勢の文 (=3f)、述語強勢の文 (=3g, 3h) というように形態統語論的・音韻的にも形式が非常に多岐に渡るが、すべて命題内容 (Lambrecht の定義における「意味論レベルの意味」) が共有されており、定義上は *allosentences* として 1 つのグループにまとまり得る関係にある。そのことを踏まえ、De Vaere et al. (2020) は、この 8 つの文に対して異構文モデルによる分析を試みても、これほど多岐に渡る形式に共通する鋳型としての構文素を決定することは困難である上に、仮に実現したところで、その構文素はきわめて抽象度の高いものにならざるを得ないことは明白であり、そのような分析に妥当性があるとは言えないと論じている。

#### 4. 議論

本節では、異構文モデルの適用に関して一定の制限を設けることで、3 節で挙げられた問題が少なくとも部分的に解消可能であることを論じる。4.1 節で、異構文モデルに関する制限についての仮説を提示し、4.2 節で、De Vaere et al. (2020) と早瀬 (2020) による批判を再検討する。

#### 4.1 構文素に対応する異構文の数について

3節では先行研究で提出された論点を2つ確認したが、これらの論点も含め、管見の限りこれまで議論されないままになっている問題がある。それは、構文素に対する異構文の数に関する(4)のような問題である。

- (4) 句レベル以上の言語単位 (= 構文) において、3つ以上の構文が1つの構文素を具現する異構文となることは可能か。

よく知られているように、異音や異形態では、3つ以上の要素がグループを成すことがある。異音の場合、音韻論のテキストでよく挙げられている例の一つである無声歯茎摩擦音 (/t/) という音素に4つの条件異音が認められている。異形態の方も、規則動詞の過去形の語尾 -ed や名詞の複数形語尾 -s という形態素には、それぞれ3つの異形態がある。同様に、語形成のレベルにおいても、異構文モデルの考え方は基本的に有効と見做することができるが、ある mother (= 構文素) が多数の sisters (= 異構文) をしたがえることもある (Audring 2019)。

一方、句レベル以上の言語単位における異構文と構文素は、句動詞の不変化詞の分布という変異形 (variants) が2つだけの「交替 (alternation)」現象を捉えるために導入されたものである。事実、言語学において語レベルを超えた単位を対象としたとき、交替 (alternation) という用語は基本的に2つの変異形のあいだで成立する関係を指すために用いられる。動詞の構文交替現象に関する研究の金字塔と言える Levin (1993) には膨大な数の交替現象が挙げられているが、すべて述語動詞の意味の中心をした2つの構文間の交替現象である。このような経緯と背景を考えれば、異構文モデルの適用範囲は変異形が2つのものに限られていても不思議はない。

ところが、(5)にあるように、Cappelle (2006) は理論上、自身の分析が2つだけではなく3つ以上の変異形の関係も捉えることができると明言している。興味深いことに、異構文モデルを批判的に検討しその修正を試みている De Vaere et al. (2020) も、この点は踏襲している (= (6))。

- (5) In this study, I want to defend the view that, ultimately, constructions and alternations can both be seen as mental “patterns”, that is, as “regularities that speakers can extract from a number of analogical usage events”. I will propose a way of capturing the relation between *two or more* formal variants of a construction without necessitating a rule-based or transformational stance.

(Cappelle 2006: 3-4; 強調は筆者)

- (6) We maintain that an analysis in terms of allostructions is only meaningful if it is reserved for those cases where *two or more* constructions are closely related, both formally and content-wise.

(De Vaere et al. 2020: 108; 強調は筆者)

しかし、句レベル以上の現象で実際に分析されるものは、変異形が2つの現象に限られているようであり、この点は、Cappelle の最近の論文でも同様である (Cappelle 2022)。Perek (2015) は項構造構文である場所格交替と与格交替を分析しているが、どちらの現象も変異形は2つである。De Vaere et al. (2020) も (6) のように述べてはいるが、実際に提示している2つの事例研究 (ドイツ語の二重目的語構文と与格構文、英語の属格名詞句と of 属格句) は、やはりいずれも変異形が2つの交替現象である。

では、3つ以上の変異形の間の交替現象に異構文分析が適用できる可能性はないのだろうか。以下ではこの点について、Breivik (1981: 9) が挙げる英語の存在構文の構文群 (= (7)) を例に考察する。

- (7) a. An account book is on the table.  
 b. There is an account book on the table.  
 c. On the table is an account book.  
 d. On the table there is an account book. (Breivik 1981: 9)

Breivik によれば、この4つの文表現は、すべて同義的 (synonymous) 関係に

ある。したがって Cappelle の想定する異構文モデルにしたがえば、これらがすべて同一の構文素 (constructeme) の具現形 (異構文) であってもよいはずである。しかし、Breivik によって提示されている各構文間の関係についての記述は、そのような分析を支持するものではない<sup>6</sup>。Breivik は4つの構文の関係を記述するのではなく、2つのペアごとにそれぞれの特徴を説明しているからである。具体的には、裸存在文 (7a) は there 構文 (7b) に対して有標な表現であり、裸存在文の場所句を倒置した (7c) は there 構文の場所句を倒置した (7d) との対立において有標な表現であるという。前者の場合、よく知られているように、新たな存在物を談話に導入する機能という点では (7b) が明らかに一般的表現であり、同じ条件下での (7a) の使用には制限がある。一方、後者のペアでは、(7c) の方に、眼前にありありと見える状況の描写に限定されるという視覚印象制約 (visual impact constraint) が課されているのに対し、(7d) にはその制約がない。この差は、以下の対比に表れている。部屋の中の空いた空間は視覚的にありありと捉える類のものではないため (8a) は不自然になるが、(8b) には問題がない。

(8) a. \*In the room is space.

b. In the room there is space. (Breivik 1981: 12)

Breivik によるこの一連の観察に対して異構文モデルを適用すると、興味深い帰結が得られる。すなわち、(7) で例示される4つの構文パターンの間には何らかの関係が認められることは確かだが、それは音素と異音の関係のように、「4つの変異形が1つの構文素の具現形としてグループを成し、その中に無標の要素が1つ存在している」という構図にはならないということである。むしろこの場合、(7a) と (7b)、(7c) と (7d) のそれぞれのあいだ別々の局所的カテゴリー関係 (異構文関係) があって、それぞれに有標の地位にある変異形が存在していることになる。

この分析には、2つの疑問が伴う。1つ目は、「(3) の4つの構文間の局所的な異構文関係は、Breivik が示唆した2つの他にもあり得るか」という疑問であり、2つ目は、「そのような局所的なレベルのカテゴリー関係に加えて、4つの構文

を統合している、さらに高次のカテゴリー関係は実在するのか」という疑問である。

まず1点目について検討する。これについては、(7a)と(7c)、(7b)と(7d)という2つのペアにも同様の異構文関係が認められるであろう一方、(7a)と(7d)、および(7b)と(7c)の間には異構文関係は成り立たないと考えられる。では前者2つの関係と、後者2つの関係は具体的にどう異なるのだろうか。ここでは、この違いを捉えるために、試案として、Cappelle (2006)の提示した異構文モデルに、(9)の条件を加えてみたい。

- (9) 句レベル以上の言語単位の場合、異構文 (allostructions) 関係は、事態描写レベルで同義関係にあり、かつ情報構造にかかわる形式的差異が最小である2つの構文間に成り立つ。

(9)により、(7a)と(7d)や、(7b)と(7c)のあいだに異構文関係は成り立たないことが予測される。これらの関係は、「2つの構文間」という条件を満たすが、「情報構造にかかわる形式的差異が最小である」という条件を満たさないからである。つまり(7a)にとっては、(7d)よりも(7b)や(7c)の方が形式的に近い関係にあり、(7b)にとっては(7c)よりも(7a)や(7d)の方が形式的に近い関係にある。具体的に言えば、(7a)と(7d)、(7b)と(7c)ともに、「場所句 (on the table) の前置の有無」「虚辞 (expletive) の there の有無」という2つの点で形式が異なるが、他の関係はこのいずれか一点でのみ異なっているという違いがある。このように、(7a)と(7d)、(7b)と(7c)のペアにおける形式的差異は他のペアにおけるそれよりも相対的に大きいため、前者は異構文を成すことはないことが(9)によって予測される<sup>7</sup>。

次に、2点目の問題について考えてみよう。仮に(9)が正しいとすれば、4つの構文をひとまとめにする上位カテゴリーとしての構文素の認定は不可能である。実際には先に述べた4通りの異構文のペアがあり、それに応じて4種類の構文素がありうることになるだろう。ただし、この4つが互いに部分的に関連し合っているという認識にも心理的実在性があり、4つをまとめて一つのカテゴリ

リーを成している抽象的な言語単位が存在そのものは否定されない。重要なのは、それが4つの構文素の上位にある抽象度の高いスキーマとしての別のレベルの「構文素」になる可能性が理論上、排除されているということである。これは、異なる音素同士の共通点を見出したとして、その上位にまた別の「音素」を認定することができないのと同じ理由である。

このように、(9)の導入によって、Cappelle (2006) が提示した「異構文分析が3つ以上の形式的変異形 (formal variants) に適用可能である」という理論的前提に制限が加えられることになる。たとえば、意味機能が似通った句レベル以上の単位の構文 X、Y、Z があった場合、X と Y と Z が同一の構文素の具現形として異構文関係をもつことはなく、X と Y、Y と Z、X と Z の間にそれぞれ別の観点において個別の異構文関係が成り立ち、それぞれのペアに別々の構文素が成立しうる。ただし、もしそのように3つの構文素が存在する場合、その3つは互いに類似したものになる可能性は高く、実質的には3つの間に密接な関係があると話者が認識することは十分にあり得ることであり、(9) はそのような関連性の認識の存在そのものの排除を意図したものではない。(9) は、そのような構文素同士に類似関係が認められたとしてもその関係は異構文 (allostructions) の関係とは別種のものになることを予測しているにすぎない。

#### 4.2 再び適用範囲の問題について

(9)の導入で理論的制約ができたことにより、3.2節で述べた異構文モデルの適用範囲についての問題は少なくとも部分的に解消する。まず、allosentencesの分析に異構文モデルが使えないことを立証するために同じ命題を共有する多数の構文 (=3) を引き合いに出している De Vaere et al. (2020) の議論は成立しなくなる。(9)によれば、仮に8つが事態描写レベル (命題レベル) で同義関係にある構文の集合であるとしても、形式的に最も近い関係にある構文2つずつのペアの間にしか異構文関係は成り立ち得ず、8つの変異形を統括する中心部 (hub) としての構文素の設定は不可能なこととして排除されるからである<sup>8</sup>。実際、話者の言語使用についての現実的な可能性を考えると、8つもの allosentences の可能性を一度に考量する必要があるような談話的要請のあるコ

ンテキストは（まさに言語学者がこういう分析を試みている時のメタ言語的使用というきわめて特殊な場合を除いては）通常あり得ないであろう。つまり (9) は、ある談話レベルのコンテキストで話者が表現を選択する際に、その選択肢（異構文）は少なくとも 2 つにまで絞り込まれているはずである、という話者の情報処理上の制約に関する仮説でもある。特定の言語（この場合はイタリア語）の話者は、様々な談話的コンテキストに対応できる (8) のような豊かな表現方略としての構文の目録をおそらく知識として持っているが、個々の使用事象においてその目録全てが同じように活性化していることは考えにくく、少なくとも 2 つまでは絞り込んでいる（場合によっては選択の余地なく 1 つに決まる）という仮定を (9) は含んでいる<sup>9</sup>。

次に、具体的にどの構文とどの構文の形式的差異が「最小」であるのかを測る基準について簡単に述べておきたい。(7)の4つの構文の場合は、2つの構文A、Bのいずれか一方から一方を作り出す際に必要な形式的操作（統語的・音韻的操作）の数によって二つの構文の差異の大きさが相対的に認識されているという分析を試みた。無論、詳細については今後の検証が待たれるが、これと類似のケースが他にもあることは恐らく間違いないであろう。

最後に、早瀬 (2020) の指摘についても再度簡単に触れておきたい。早瀬は異構文分析の対象にならない可能性が高いものとして (10) と (11) を挙げたのであった。

- (10) a. It seems that he is drunk.  
b. He seems to be drunk. [(1) を再掲]
- (11) a. This milk is too hot to drink.  
b. This milk is so hot that I cannot drink it. [(2) を再掲]

まず (10) から考えると、この 2 つの文の命題は共通していて情報構造のみが異なるため、*allosentences* の関係にあるとは言えるだろう。では、これらは異構文でもあるのだろうか。(9) を導入した本稿の立場では、(10a) と (10b) は実質的に同義であり、2 つの構文の差異をもたらす統語的操作は一つだけ (いわゆ

る繰り上げ (raising)) で、かつ主節述語 (=seem) も共有されているため、異構文関係と捉えて問題がないことが予測できる。

一方、(11) のペアについては少し複雑である。これらの文は 2 つの命題間の関係が「因果関係」で結ばれ、かつ否定が関わっている。因果関係や否定が事態描写の一部を成すかどうか、すなわち (9) の適用範囲に該当するかどうかという点を吟味する余地がある。また仮に適用できたとしても、(11) の 2 つの構文は極性 (polarity) の点で「同義」と認定してよいかどうか疑問が残る。(11a) の構文は否定辞 not を伴わずとも否定の意味が伴うが、(11b) にはそのような性質がない (そのため (11a) と「同義」にするために従属節内に not が伴っている)。さらに、2 つの文の同義性を保持して極性のみを反転させようとしても、上手くいかない。(11a) のどこに not を加えても、(11b) から not を除いたものと同じ命題は作れないからである。(11) は、このような複雑な意味構造を有する「構文」間に異構文関係が成立することがあるのか、また異構文はどのような規模の言語単位にまで適用可能なのか、といった問題を検討することの必要性を認識させられる例である。

## 5. 結語

本稿では、Cappelle (2006) が提唱した異構文モデルに対して先行研究で出された批判的議論を踏まえ、特に句レベル以上の言語単位を扱う際には、異構文関係が 2 つの変異形のあいだにのみ成立するという制限を加える可能性を議論した。4 節で提示した (9) の仮説はあくまで暫定的なものにすぎないが、モデルを実際に拡大適用し、話者の言語知識 (いわゆる constructicon) の解明に資するものにするためにはこのような類の制限が必要であること自体は確かである。

異構文モデルを含め、話者の言語知識を成す構文間の関係性 (relatedness) に関する議論は昨今、ますます活発になっている。構文間の垂直的関係 (vertical links) と水平的関係 (horizontal links) の違いは実は分析における表記上の違い (notational variants) であるという新しい方向の主張もある (Ungerer, to appear)。筆者も含めた構文文法に立脚する研究者は、今後もこの議論に積極的に参加していかなければならないだろう。

## 謝辞

建設的なコメントを頂戴した二名の査読者に御礼を申し上げたい。本稿をまとめるにあたり、Bert Cappelle 氏と直接議論を交わす機会を得られたことは非常に有益であった。筆者からの再三の質問に忍耐強く応じていただいた同氏に記して御礼を申し上げたい。本研究の一部は JSPS 科研費（課題番号：19K00697）の援助を受けて行われた。尚、本稿の不備はすべて筆者の責任によるものである。

## 注

- 1 allostruction という用語に対する「異構文」という日本語訳は早瀬 (2020) に従う。
- 2 Cappelle (2006) は構文素 (constructeme) という用語は導入しておらず、Perek (2015) で初めて導入されている。Perek がこの用語で意図している「異構文の上位カテゴリーであり、部分的に形式的指定のないパターン」のことを Cappelle 自身は一貫して“construction”と呼んでいる。これは、異構文を単に句レベルの現象に限定したのではなくあらゆる言語単位に当てはまるもの規定したい Cappelle の意図（詳細は本稿の 3.1 節参照）の表れかもしれないが、本稿では便宜上、これ以降は「構文素」を使用する。（尚、「構文素」という日本語訳も、「異構文」と同様、早瀬 (2020) に従ったものである。）
- 3 Cappelle (2009) は、句構造交替における 2 つの変異形を話者は自由に選択しているのか、という問いに取り組んだ論文であり、2 つの変異形の選択はある程度までは種々の要因によって決定されているが、完全な予測は不可能である、という結論に至っている。尚、この問題に関する Cappelle 氏の認識は現在も変わっていないとのことである（2023 年 6 月 8 日、Bert Cappelle 氏個人談話）。
- 4 この議論との関連において、話者による形式の選択の自由度についての Jakobson (1971: 53) の考察は注目値する。Jakobson によれば、話者による選択の自由度は、言語単位のサイズに比例して大きくなる。つまり話者の選択の自由は弁別素性から音素を作るプロセスにおいてはゼロであり、音素から語を作るプロセスでも非常に制限されているが、語を組み立てて文を作るプロセスになるとその制限はさらに弱まり、文を組み合わせで発話（談話）を構成するとなるとさらに制限が減って話者の自由度はさらに高くなる。この洞察は、要素間の相補分布が成り立つことと、話者による選択の自由が制限されているということが表裏一体の関係にある可能性を示唆している。構文の水平的関係

におけるこのような選択の（不）自由さの問題は、Diessel (2023: Chapter 5) が導入した類似性 (similarity) と対立 (contrast) の区別とも関わってくる可能性がある。Diessel によれば、ある種の水平的関係（構文のグループ (construction families) など）は類似性に基づいて形成され、別の水平的関係（屈折による語形変化など）は対立を基盤にして成り立っており、異構文は、類似性と対立の両方の特徴を備えたものと位置付けられる。これを Jakobson の洞察と併せて考えると、類似性を基盤にして成り立つ関係であることと、話者による選択の自由度は密接に関係している可能性が伺える。

- 5 “allosentence” という用語には定訳がない。「異文」という訳を充てることもできないが、言葉の違和感もさることながら「異構文」と区別がしづらくなるというデメリットを考慮し、本稿では allosentences という原語のままの表記を採用しておく。
- 6 言うまでもなくこの当時に異構文という概念は存在していないが、後に見るように、Breivik (1981) の観察・記述は異構文モデルにとって重要な示唆を含むものである。
- 7 Audring (2019) は、語形成のレベルでは上位カテゴリー (“mother”) の下にある成員 (“sisters”) 同士は互いにすべて同じように関係を持っているということも想定できると考えている。同じことが、本稿で見ている節レベルの構文現象には当てはまらないとしても不思議はない。
- 8 De Vaere et al. (2020) は形式と意味内容が十分に近い構文間でありさえすれば構文素の設定は可能と考えている (p. 108)。つまり、もし (3) の 8 つの構文が形式も意味も互いに十分に近い関係にあるようなことがあれば、この 8 つを異構文とする単一の構文素が実現しようと考えていると思われ、2 節で見た彼らの議論はこのような前提を踏まえたものであることが推測できる。
- 9 Lambrecht (1994) における allosentence の定義の中で「ペア (pairs)」という言葉が用いられていることから、Lambrecht もまた、allosentence 関係は二つの文のあいだに成り立ちうるものと捉えていたことが推察できる。また、Lambrecht (1994) は述語焦点 (Predicate Focus = PF)、項焦点 (Argument Focus = AF)、文焦点 (Sentence Focus = SF) という焦点カテゴリーの 3 つの類型を提案し、各言語はそれぞれを区別するための形式（＝広義の「構文」）を備えているという主張をおこなったが、Lambrecht (2000) では、この 3 つのうち PF と SF を表す 2 種類の構文間のパラダイムの対立の重要性が強調されている点は興味深い。

## 文献

- Audring, Jenny (2019) “Mothers or sisters? The encoding of morphological knowledge.” *Word Structure* 12(3), 274-296.
- Birner, Betty J. (2018) “On constructions as a pragmatic category.” *Language* 94(2), e158-e179.
- Breivik, Egil (1981) “On the interpretation of existential *there*.” *Language* 57(1), 1-25.
- Cappelle, Bert (2006) “Particle placement and the case for ‘allostructions’.” *Constructions, Special Volume* 1, 1-28.
- Cappelle, Bert (2009) “Can we factor out free choice?” In Andreas Dufter, Jürg Fleischer and Guido Seiler (eds.) *Describing and Modeling Variation in Grammar*, 183-201, Berlin & Boston: Mouton de Gruyter.
- Cappelle, Bert (2022) “Lexical integrity: A mere construct or more a construction?” *Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association* 10, 183-216.
- De Vaere, Hilde, Julia Kolkman, and Thomas Belligh (2020) “Allostructions revisited.” *Journal of Pragmatics* 170, 96-111.
- Diessel, Holger (2019) *The grammar network: How linguistic structure is shaped by language use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diessel, Holger (2023) *The constructicon: Taxonomies and networks*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele E. (2002) “Surface generalizations: An alternative to alternations.” *Cognitive Linguistics* 13(4): 327-356.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at work*. Oxford: Oxford University Press.
- Hilpert, Martin (2019) *Construction grammar and its application to English, 2nd edition*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Jakobson, Roman (1971) *Studies on child language and aphasia*, 49-73, The Hague: Mouton.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2000) “When subjects behave like objects: An analysis of the

- merging of S and O in Sentence-Focus constructions across languages.” *Studies in Language* 24(3), 611-682.
- Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Neset, Tore and Laura A. Janda (2023) “A network of allostructions: Quantified subject constructions in Russian.” *Cognitive Linguistics* 34(1), 67-97.
- Perek, Florent (2015) *Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Ungerer, Tobias (to appear) “Vertical and horizontal links in constructional networks: Two sides of the same coin?” *Constructions and Frames*.  
[<https://tungerer.github.io/files/Ungerer-forthc-Vertical-and-horizontal-links.pdf>]
- Van de Velde, Freek (2014) “Degeneracy: The maintenance of constructional networks.” In R. Boogaart, T. Coleman, and G. Rutten (Eds.) *Extending the scope of construction grammar*, 141–179, Berlin & Boston: De Gruyter Mouton.
- 早瀬尚子 (2020) 「第 II 部 構文文法」坪井栄治郎・早瀬尚子（共著）『認知言語学 (1) 認知文法と構文文法』122-256, 開拓社, 東京.

## Some Thoughts on “Allostructions”

Yusuke MINAMI

Cappelle (2006) formulated the “allostruction” model to capture the close link between two word-order variants of the particle placement alternation in transitive English verb-particle combinations (i.e. [verb – particle – object] vs. [verb – object – particle]). The model has raised awareness of the possibility that paradigmatic (“horizontal”) links across constructions with formal differences, in addition to long established “vertical” links, play a key role in pursuing the speaker’s knowledge of language in the Construction Grammar enterprise; it has generated a number of analyses, and has also sparked considerable discussion on its viability and limitations. Against this background, this paper will take up two recent critical arguments about the allostruction model, which claim that the model should not be applied as widely (or freely) as originally envisioned by Cappelle. In light of these, I present a tentative hypothesis that, as for linguistics units (“constructions”) larger than the phrasal level, the allostructional relation only holds between exactly two variants which are minimally distinguished in form. This, I argue, will avoid the problem of the allostructional “inflation” under one and the same supercategory (“constructeme”). I then suggest that some restrictions are required for this model to be more of a viable theoretical tool to investigate the “constructicon” of the speaker.

**Keywords :** allostructions, constructeme, paradigmatic relations, Construction Grammar  
キーワード：異構文、構文素、パラダイムの関係、構文文法